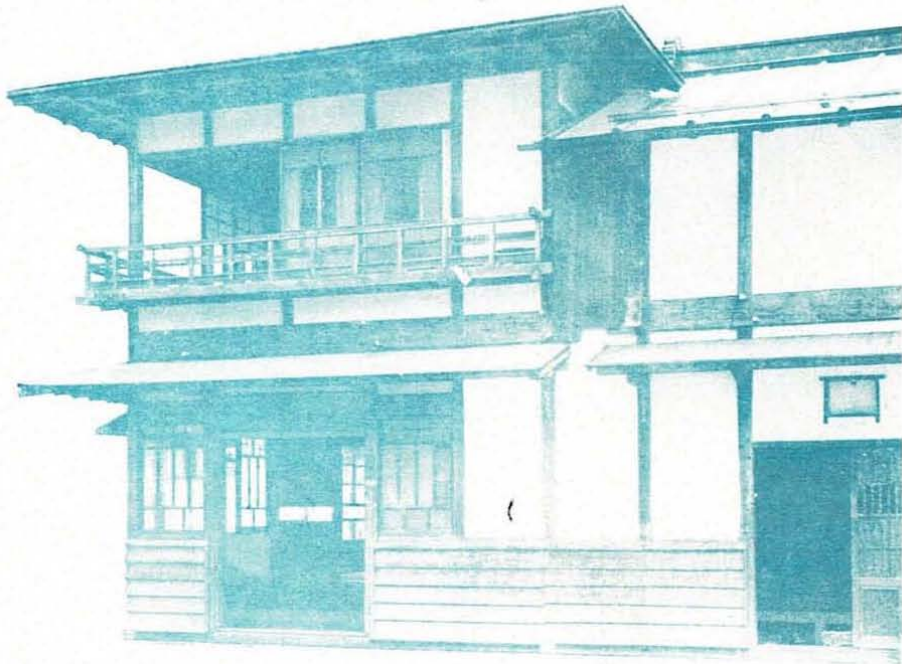




小平浪平
Mr. N. Odaira



渋沢元治
Dr. M. Shibusawa



大黒屋

山梨県北都留郡猿橋町大黒屋（宿屋）。明治39年7月15日夜この宿屋で小平浪平（当時東京電燈会社技師送電課長）渋沢元治（当時通信技師）会談。小平は本邦に電気製作事業を起そうという抱負を語った。

Daikokuya Hotel
(Saruhashi-machi, Kitatsurugun, Yamanashi prefecture.)

話は明治39年（1906年）にさかのぼる。余はこの年の2月に海外留学から帰り、5月に通信省に入省して、電気試験所に勤務した。当時の電気試験所は、通信に関しては試験や研究をしていたが、電力に関しては本邦電気事業の電気工作物を検査することを任務としていた。余は海外特に独国のババリア、スイス国、米国西部等における水力の開発、長距離送電事業について、相当長く研究して帰って来たのであった。当時本邦は日露戦争後の産業ぼっ興の時機に当っており、その原動力たるべき水力は幸い各地に散在しているので、これを開発し、電力として本邦全般に普及させるのが急務であると信じていた。それには先ず本邦電気事業の実際の状況を研究するのが、さしむきの問題と思って入省したのであった。同年7月15日であった。余は山梨県の甲府附近にある水力電気を検査することを命ぜられて、飯田橋から（当時は飯田橋から発車した）甲府行の汽車に乗った。ところが車中偶然小平浪平君に会った。同君は明治33年余と共に東京帝国大学工科大学電気工学科を出た同窓である。久し振りの会見で車中時の移るを知らなかったが、同君は「君に折入って話したいことがあるから、今日猿橋で一緒に泊ってはどうか、明日一番の汽車でたてば君の公用にも差支えはおこるまい」との勧めで、同地の大黒屋に一泊することとした。この日は朝来豪雨であったが、夜に入って小止みとなり、庭の木の葉から落ちる雨滴の音と、桂川の俄か増水のための水音を除いては、山間の小さな宿屋の一室のことであるから、極めて静かで、親友同志の久しぶりの会談には絶好の機会であった。

小平『余は先日、日立鉱山の経営主である久原房之助氏から、鉱山の電力方面を担当してくれという勧誘を受けた。同氏には小坂鉱山に勤務した時から知遇を辱うしているの、勧誘に従って、この鉱山に行きたいと思う。』

当時小平君は東京電燈会社に勤めていた。同社は桂川の水力を利用して猿橋のそばの駒橋に発電所（現存している）を作り、55,000ボルト（当時の最高電圧）で東京へ送電して、従来の火力を全部水力に改めようという工事をしていたが、同君はその工事の送電の方の主任をしておられた。これをやめて日立鉱山へ転じようという意見であった。

余『本邦は水力開発、電気普及を急務中の急務、即ち国策として促進すべきであ

る。君は今、日本においてはもちろん、世界においても最高電圧というべき電圧を以て、電力を遠距離に送電する画期的の技術を担任している。この技術を修得することが国策遂行の第一歩であって、電気技術へ志す者の最もうらやんでいる絶好の地位である。それを辞して鉱山の電力のような、従の仕事に移るといふことは、どうしても賛成できない。』

小平『君のいうように水力開発、電気普及を重要な国策とすべきことはもちろん同感である。しかしながら、今僕の従事している水電工の仕事は、外国から機械器具を輸入し、しかもその各々の製造会社から、それぞれ技術者を雇入れて来て、これ等の技術者がすえ付を担任している状態である。

(注、この東京電燈の工事では水車はスイス国のエッシャウイス社から、発電機は独国のシーメンス社から、5万5千ボルトの変圧器は米国のジー・イー社から、又東京市内の1万ボルトの地下ケーブルは、独国のシーメンス社から購入し、それぞれ製造会社から少くとも1名ずつ各国の技師又は職工長格の堪能な技術者を雇入れて来て、すえ付はもちろん、逋信省の検査の終るまで指導を受けていた。) かようにあちらから先生が来て実地に教えるのを覚えるということは難かしいことではなく、誰にでもできる。要は、これ等の機械器具を日本で作るようにしなくてはならぬ。』

余『君の意見ももっともである。しかし、今日の日本の電気機械製作事業の有様はどうであるか。とても、こんな高い電圧の大きな機械を作るようになることは、短い期間には不可能である。それを待つてからでは水力開発、電気普及は非常に遅れて了う。従って日本の産業はそれだけ遅れるわけである。今は日本で製作のできないものは急いで輸入してもよいから、早く電力を豊富にすれば、他の一般産業を急速に興すことができる。そうすれば、電気機械の製作事業も、おいおい日本で興って来る。君が電気機械製作事業に転任するというならば一説であるが、鉱山会社に入つては仕事は従属している電気部であるから、たかだか鉱山に用うる電気機械の修理位であろう。』

小平『もちろん初めは修理に甘んじて仕方がない。しかし、それから経験を重ねて行けば、おいおい自分で作れるようになれると思う。』

余『鉱山業に従事しては、主な仕事が鉱山であるから電気機械に専念することは難かしくないか。結局、鉱山の仕事の手伝いをさせられるという位なものではなかろうか。』

会談はこんな調子であった。小平君は腹の底には大きな抱負を持っておられたのであろうが、一体大言壮語をして議論することはきらいな性格なので、他日の大成を期するような大きな望みはいわれなかったけれども、しかし、外国から機械器具を輸入して、これをすえ付けて行くという仕事には気が進まない、やせても枯れても自分で作って見たい、又それでなくてはわれわれの目的とする電気普及は達せられない、という決心を相当堅く持っておられたようであった。

一方この考えがあったためか、前年東電の送電主任という地位についたものの、何となく落ち着かないところがあった。そこへ小坂鉱山在職以来知遇を受けた久原氏からの強つての懇望である。いわゆる知己にむくいる気分が濃厚であるように感じられた。かくて、しめやかな夜深更に至るまで、本邦の工業殊に電気事業の将来について、互に論じ、互に語りあったが、結局各々志すところに進むこととしたのであった。その後、小平君は日立製作所を設立され、周知のごとく同社は隆々たる発展を見るに至った。この有様を見て余は常に、さきの夜、同君の意志が堅くて余の意見に従わなかったことを、同君のため又本邦電気事業のために喜んでいた。40年後の今日、当夜を追懐して、当時の余の意見であった水力開発、電気普及が、わが国の産業を興す基であるということは今もなお誤っていないと信ずるが、しかしながら、小平君の意見は更に抱負の大なるものであって、しかもその抱負を日立製作所において実現され、ために余の希望も達成されたことは、日本のためにも慶びに堪えないのである。

一般に本邦の工業界における知名の機械製造会社は、外国の優秀会社と提携し、その技術を輸入し、その指導を受けて発展したものが極めて多い。技術の幼稚な時代に優れた先進国から学ぶということは推奨すべきことで、それがために技術も進歩する。さりながら、あまりに他に依存することは、これに慣れて自分の特異性を発揮することを怠りがちになり易い。従って日本人としての優れたところを発揮し難いものである。日立製作所はこれと異なって、全く独力で苦難の道をきりひらき、

文字通り悪戦苦闘を続けた。失敗に失敗を重ね、その経験から自ら会得して発展したのであるから、その技術に本邦人の特異性を発揮したところがすこぶる多い。この点は余が常に敬服措く能わざる所である。

今や日本は誤れる指導者のために、敗戦の運命にあって、小平君が40余年の歳月を以て築き上げた日立工場も戦災を受けてあわれむべき残がいとなった。また小平君初め有力な幹部諸君も退職せられるのやむなきに至った。諸君の胸中を察すると、感慨無量同情に堪えないものがある。余はこの機会に日支事変ぼっ発当時に至るまで即ち日立製作所が平和産業として発展の極度に達したとき迄の歴史を編さんすることを、小平君初め諸君にお勧めした。丁度昭和13年は創立30年に相当するので、さきに同社でも日立30年史編さんの企てがあつて、既にそれに要する資料を集めておられた。しかしその資料を一読するに、これは同社各部門を担当された多くの諸君が、各々担任事項について執筆されたものであり、また中には戦災のため欠けたものもあった。故に資料としては非常に貴重なものであるが、一貫した歴史としては統一がとれていない。そこで、これ等の資料を基として、編さんすることを余に委嘱された。余は小平君との40年来の情ぎと、前述のような因縁があるので、喜んでお引受した。同時に次のような意図もある。この製作所の発展の歴史は前述の理由から日本人の製作技術の発展の歴史といつても過言ではないと思う。故に本邦人が欧米諸国より劣っていると認められるこの種の技術の進歩に、本書が幾分でも貢献して、再建の責務を負っている青年技術者諸君を発憤激励することができれば、きん快に思うのである。

昭和 23 年 12 月

渋 沢 元 治